



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	フォサイス・ルネサンスについて
Author(s)	管井, 大果
Citation	基督教学, 4, 66-68
Issue Date	1969-07-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46235
Type	journal article
File Information	4_66-68.pdf



フォサイス・ルネサンスについて

管 井 大 果

半世紀以前のフォサイスの諸書が今再び英米において版を重ねている許りでなく、モズリー、ヴィドラー、ウィリアムズ、ケイヴ、ミクレム、ジェンキンス、ホエール、コックス等英国の学者達、デイリストン、ウエデル、R・M・ブラウン、ブラドリー等米国の学者達が、一世を風靡したバルトの神学の影響にも拘わらず、フォサイスの影響を受け、フォサイスを研究していることによつて、我々はフォサイス復興をそこに認めないわけにゆかない。

ブラウンによると、フォサイスの論題は「賜物を受くるに値しない人間、その人間に対して神が無代償の賜物として自己を与えること、その福音の内実を現代生活の種々な面にもたらそうと求めること」である。

フォサイス神学が出現した思想史的背景は、自由主義と根本主義（正統主義）が、過渡的混乱時代を形造つていた。その混乱の要因は、1、聖書批評学との衝突。2、新科学との衝突。3、内在の哲学の問題。4、比較宗教の問題。5、英国神学者のドイツ偶像視（ドイツは自由主義）である。

フォサイスが影響を受けた主な神学者は次の通りである。先ずモーリスは普遍的人性の概念をフォサイスに貢献し、リチュルの貢献は1、「道徳的」を強調。2、個人は全体の一部とする。3、人類の代表としての基督を強調。4、リチュルは、代償説に反対したが初期のフォサイスも反対。両者の相違点は、フォサイスはリチュルの二極説に反対。基督論について1、リチュルの基督の

先在説は、神の爲のみで、人間にはそれが隠されている。
2、謙虚説はフォサイスに本質的だが、リチュルは反対。
フォサイスは特に道徳的という点をリチュルに負うている。その他フォサイスは五十人以上の神学者に負うているといわれる。

フォサイスは恩寵の究極性を究明したが、その神学的特質は「積極的」であり、積極的福音である。彼が「積極的福音」によって示すものは、1、恩寵の神の行為。2、事実であるだけでなく再生。その現実的道徳的境界は①、神の充全且つ決定的赦し、②基督の故にこれを断行。③、信仰は赦しに基礎付けられる。④、以上三点が道徳的生活の根源又規準。3、權威をもつ。それは神の權威で、客観的且つ歴史的。權威と自由は相即的でそこに奉仕と自由の弁証法がある。彼は積極的福音の三点を、「教会」に於いて理解し、そこで恩寵は礼典的賦与的となる。恩寵は神聖性を伴い、恩寵と罪責は弁証法的關係をもつ。罪は社会的連带的で、それは質的原罪として量の軽重に関わらない。罪を罪責たらしめるのは神の聖である。罪責により人間自身は地獄であり、そこに

危機がある。その処置として審判がある。（これは刑罰ではない）普遍的な罪と神との關係の変更として和解、贖罪、救済がある。これらは一つの行為的事実でそれは十字架である。その十字架には解釈が必要で、キリスト教の全体はこの解釈にかかっている。(1)、十字架解釈の原理。1、基督の十字架はその救済経験による解釈が必要である。2、啓示は贖罪である。3、神の聖。①、神の超越性、他者性。②、恩寵による神の親近性。③、聖は審判と關係。④、聖は贖罪。(2)、解釈の動機、誘因。人間の所作によらず神の贖罪。1、基督の事業と英雄の相似点。①、死と復活。②、善行は他者に知られず。2、両者の相違点。①、英雄は義務、イエスは聖愛。②、英雄の死は一回。イエスは全生涯。③、英雄の知識は有限。イエスのそれは無限。④、英雄の行為は義務。イエスのそれは恩寵。十字架解釈の結論。1、十字架と恩寵の同一視。2、基督の服従の強調。3、客観的贖罪の強調。4、十字架は審判と和解の両面を啓示。十字架（贖罪）は基督論（格身論）を必然とし、両者は不可分離的。基督にあるとは神にあることで、啓示は基督。基督は仲保

者、代表者。格身論の要点。1、基督先在の強調。2、ケノーシス、自己否定。3、プレローシス、自己充満。

基督論は教会論に完成。新人性は社会的、統一的、で基督はその代表。それが教会論へ。恩寵が教会を創り、福音の上に教会があり、兄弟愛の上にそれはない。二礼典は一つの恩寵手段として福音の見現である。礼典は行為された御言。洗礼は一回限りの礼典。聖餐は反復の礼典。教職も礼典的。贖罪の客観性により教会は普遍的。二つの誤謬。1、ロマ教会の一致は恩寵の自由を喪失。2、会衆派の原子論は排他的で教会を破壊。教会と社会について二つの誤謬。1、内向き―教会の内的奉仕のみを行なう。2、外向き―基督教政党になる。教会と社会は個人を介して間接的に働き、両者は神の国に対して共働者である。

フォサイス神学は、主観主義、抽象的合理主義、個人主義等の誤謬に対決して、体験面が宣教面と弁証面を媒介する三一神論的構造を以って、それらを克服した。

フォサイス神学の評価。ホエール。彼の業績は四分の一世紀間、時代遅れになるどころか、現代の「現実主義」

を予想しつつ進展した。ガンマー。彼は予言者の洞察と霊的感覚をもつ。モズリー。フォサイスは米国教義学の最高の神学者。マツコーナツキー。バルト以前のバルト派。ヒューズはこの批評を批判。相違点1、フォサイスの神はイエスの神。バルトは旧約的。2、フォサイスは啓示と歴史の極端な分離をせず。3、罪の分析はフォサイスがより徹底的。4、フォサイスには啓示と人間の間の合理的二元論がない。フォサイスをバルト派にするのは無理。

フォサイスへの批判。1、彼は十字架を強調して、托身と復活が弱い。2、自由主義の反動として神の聖は一方的客観的？ 3、彼はイエスの宗教と基督の福音を区別するが、イエスの人性の欠如。4、罪責と悪の区別が明瞭でない。5、彼の新人性はヘーゲ尔的？ 6、二つの語を数の意味に用いるが必ずしも成功せず。特に、人間学的考察が弱い点が目立つと思う。宣教のキリストと史的イエスの橋渡しも明瞭でない。これらは今日の課題として残されていると思う。